

欧米人の旅行記 10 選

奈良県立大学 名誉教授
西田 正憲

1. はじめに

欧米人による瀬戸内海の風景の賞賛は 19 世紀に始まる。彼らは、瀬戸内海を2～3日で航行する蒸気船に乗って、ほとぼしるように瀬戸内海を賞賛し始める。ヨーロッパで山岳や海洋の自然賞賛が広まるのは 18 世紀後半以降のことであり、ロマン主義の普及や地理学の発展と一体となっていた。19 世紀に来日した欧米人は自然賞賛のまなざしをもっていたのである。本論では瀬戸内海の風景を賞賛した旅行記 10 選を紹介したい。選定は風景論からみた重要性、著者の知名度、記述の多さなどから判断した。文献は見聞記、日記、評伝も含む。引用文は紙幅がないので一部分のみである。選定にあたり、オールコック、クック、チェンバレン、ヴィンセント、モラエス、パーソンズ、モース、ウェストンなどの著書も紹介したいと迷うところであったが、10 選に絞ると次のとおりとなった。

2. フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト『江戸参府紀行』1832～51

1826(文政 9)年、オランダ東インド会社オランダ商館付きのドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは商館長の江戸参府に随行し、瀬戸内海を船で往復する。のちにオランダで出版した 20 分冊の大著『日本』の第4編に「1826 年の江戸参府紀行」を著している。シーボルトは医学、植物学、地理学などの自然科学を修めた近代の人であった。彼は備讃瀬戸の塩飽諸島に船でさしかかって、次のとおり具体的に風景を賞賛する。瀬戸内海の風景を詳しく賞賛した最初の記述である。

この内海の航海をはじめて以来、われわれは日本におけるこれまでの滞在中もっとも楽しみの多い日々を送った。船が向きをかえるたびに魅するよう美しい島々の眺めがあらわれ、島や岩島の間に見えかくれする日本[本州]と四国の海岸の景色は驚くばかりで一ある時は緑の畑と黄金色の花咲くアブラナ畑の低い丘に農家や漁村が活気を与え、ある時は切り立った岩壁に滝がかかり、また常緑の森のかなたに大名の城の天守閣がそびえ、その地方を飾る無数の神社仏閣が見える。はるかかなたには南と北に山が天界との境をえがいている。隆起した円い頂の峯、それをしのぐ錐形の山、きざきざの裂けたような山頂が見え、一峯や谷は雪におおわれている。

続けて地質を花崗岩、石英、片麻岩からなると述べ、そして次のとおり多島海の成因についてしるす。自然科学から風景を語ることを始める。

これらの島の多くは険しい岸で特色づけられ、海面下に連なっている山脈の頂上と思われ、その方向は概して東北をさし、山脈の性質は火山活動による成立を物語っている。それは有史以前の地殻変動の舞台であるが、温和な島国の気候と千年の努力が、これを野趣の溢れたロマンチックな庭園に作り変えたのである。
(斉藤信訳『江戸参府紀行』平凡社 1967)

シーボルトの旅行記にはのちに欧米人が賞賛する瀬戸内海の風景の原型がくっきりとあらわれている。内海多島海の地理的概念、地形地質や植物、人文景や生活景、光の輝きや色彩、楽園幻想、船から眺める移りゆく風景、のちの欧米人はこれらをより豊かに表現していったにすぎない。

3. ロバート・フォーチュン『江戸と北京』1863

イギリスのロンドン園芸協会の園芸学者でプラントハンターのロバート・フォーチュンは、1860(万延 1)年から 62(文久 1)年にかけて、上海、北京とともに、日本を訪れ、1863(文久 3)年旅行記『江戸と北京』を出版した。フォーチュンは、瀬戸内海の前評判を知ったうえで、そこを訪れた一人であった。彼は「天然の美」と題する章で「このような明媚な風景に心を奪われた経験は、船客はもちろん、船員でさえまれであった」と瀬戸内海を絶賛する。そして、彼は自然景と人文景・生活景が一体となった瀬戸内海の風景を賞賛し、次のとおりしるす。

たしかに幅が一マイル半よりも狭い島の間を通った。その辺の景色はまた格別で、おそらく今までに見た中で最上のものであった。好ましい村や寺院や農家などが、さまざまな角度から眺められた。時々、丘のずっと後ろの方まで高台を耕した、肥沃な畑地の前を通り過ぎた。手のこんだ草葺きや瓦屋根らしい家々もまた、東洋諸国ではめずらしく快い清潔なたたずまいであった。
(三宅馨訳『江戸と北京』廣川書店 1983)

4. アルフレッド・ルサン『フランス士官の下関海戦記』1866

フランス軍艦の海軍士官アルフレッド・ルサンは 1864(元治 1)年英仏米蘭の四国連合艦隊による下関砲撃に参加、その見聞記を 1866(慶応 3)年に『日本の沿岸の攻撃戦』(邦訳『フランス士官の下関海戦記』)として出版する。戦いの模様を詳細に伝えるが、瀬戸内海の風景も賞賛して次のとおりしるす。

これほどの見晴らしがあるなどとは考えもつかないような素晴らしい景色に私たちは夜まで目を見張り、魅了されて立ち尽くした。二つの岬の間に押し込められたかと思うと、次には奥行きのある湾の前で幅が広がるというように、水路は、急流に運ばれる私たちに一瞬ごとに新しく予測のつかない光景を見せてくれるのだった。
(樋口裕一訳『フランス士官の下関海戦記』新人物往来社 1987)

5. フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン『支那旅行日記』1867

ドイツの地理学者フェルディナント・フォン・リヒトホーフェンは 1867(慶応 3)年カリフォルニアから上海に蒸気船で向かう途中瀬戸内海を2日間で西下、没後の 1907(明治 40)年、この時の日記『支那旅行日記』が公にされる。彼は次のとおり、賛美する瀬戸内海の風景について、海岸や山地の地形を客観的に説明する。植物や地質にもふれ、火山地形についても詳しく説明する。

内海の航行は素敵である。景色は絶え間なく変化し、深く分岐した入江や、突端や、岬や、無数の島々が現はれる。凡てが山又山で多種多様な形をしている。北には、主に赤味がかった山脈がある。南には、高い険しい山脈が海から聳え、それらの多くは、海の中へ分岐している長い山脊である。山脈の植物は大抵カリフォルニア海岸地域風の脊の低い灌木で、その間から岩がのぞいている。針葉樹と闊葉樹の二種からなるもっと高い樹木が灌木の単調を破っている。目に見えるすべての岩、特に島の麓にあるそれは花崗岩の様に思はれる。が、四国には火山とおぼしき円錐形の山が見え、その二、三のものは七百五十米の高さに迄達している。

(海老原正雄訳『支那旅行日記 上巻』慶応書房 1943)

リヒトホーフェンは瀬戸内海を天国だと絶賛する。そして、この最大の敵は文明と欲望の出現だと有名なくだりをしるしている。まるで 100 年後を見透かしたような慧眼であった。

6. エーメ・アンペール『アンペール幕末日本図絵』1870

スイスの首席全権エーメ・アンペールは1864(文久3)年来日、約10カ月間日本に滞在して修好通商条約を結ぶ。この時の見聞記を1870(明治3)年に、パリの出版社から『日本図絵』(邦訳『アンペール幕末日本図絵』)として出版する。アンペールは、オランダ軍艦で長崎港から横浜港に向かう途中、瀬戸内海を航行し、瀬戸内海は「土地に囲まれた海」というより運河の性格をもっていると述べ、移りゆく島々の風景に見入って「これが瀬戸内海の航海の大きな魅力であった」とする。島々ばかりではなく本州と四国の兩岸の風景にも魅入られ、「限りなく移りゆく画面のシリーズ」と表現してシークエンス景を堪能する。そして、瀬戸内海の光、色彩、霧などをつぶさに捉え、そこに故国スイスの山岳の湖水風景との類似を見だし、幸福な気分に入る。次のとおりしている。

そこには、太陽の光で金色に輝いた砂浜が海と交じわる、偉大な海洋の景色があるかと思うと、たちまち、遠い山脈が霧に包まれてはるか遠く頂上だけを現している景色もある。また、ごく明るくて清らかな、つつましい、小さな風物もある。たとえば、杉の森に取り巻かれた青々とした畑のある、平和に満ちた入江の小さい村のようなもので、そこへ行くと、六月のすがすがしい朝、ジュラ山中の湖にいるような気がするに違いない。
(高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵』雄松堂書店1969)

7. アレクサンダー・ヒューブナー『オーストリア外交官の明治維新』1873

オーストリア・ハンガリー帝国の外交官アレクサンダー・ヒューブナー男爵は、世界一周旅行の途次の1871(明治4)年日本を訪問、1873(明治6)年この時の旅行記『世界周遊記』(邦訳『オーストリア外交官の明治維新一世界周遊記<日本編>』)を出版、船で西下した瀬戸内海を賞賛し次のとおりする。科学的用語こそ少ないが、観察するまなざしをしっかりと身につけていた。

名状し難い絶景の故、当然のことながら名高い風景の一つ一つを成すものは、絶えず同じ内容だった。今日は鏡のような海が、代わる代わる湖のようになっていたり、河のようになっていたりした。いたるところに無数の休火山があり、大洋の波に似て円くなった岩塊が側面に並んでいた。岩塊には、密生した植物群落が覆っていた。峡谷の側面は雛壇式に整地され、段々畑となっており、岩山の尾根はさまざまな樹木で飾られていた。
(市川慎一他訳『オーストリア外交官の明治維新』新人物往来社1988)

8. エドモン・コトー『ボンジュール・ジャポニー青い目の見た文明開化』1884

フランスのジャーナリストで職業旅行家のエドモン・コトーは、1881(明治14)年シベリアの調査旅行の帰途日本と中国に立ち寄り、1884(明治17)年この時の旅行記を『極東旅行』(邦訳『ボンジュール・ジャポニー青い目の見た文明開化』)として出版、この中で往復した瀬戸内海を賞賛して、人文景・生活景を次のとおりする。

この詩情豊かな自然がつくる独特の魅力は、それを目のあたりにしない限り、到底理解することはできない。万古不変の日本の景観美は、たんに大地の凹凸に由来するだけでなく、色彩の彩度とその驚くべき多様性から生まれる。耕された畑地、人家、黒い岩、黄色い砂浜、船の白帆と青々とした海！それらはすべて時には眩い光に照らされ、時には半ば闇につつまれながらさまざまな明るさのなかで限りなく甘美な装いを帯びて現れる。

(幸田礼雅訳『ボンジュール・ジャポニー青い目の見た文明開化』新評論1992)

9. エリザ・シドモア『人力車で見る日本』1891

中国やジャワの旅行記を著したアメリカ人女性エリザ・シドモアは、3年近い滞在を含む2度の来日について、1891(明治 24)年見聞記『人力車で見る日本』(邦訳『シドモア日本紀行—明治の人力車ツアー』)を出版、その中で6度訪れた瀬戸内海をアルカディア風の地域として次のとおりしるす。アラスカの海岸に似ていると聞いていた彼女は、その穏やかな瀬戸内海にアルカディアを見る。

アラスカ南東部の海岸が瀬戸内海によくたとえられるが、アラスカの航海で見られる狭い水路や荒々しい渓谷や山々の絶壁はこのアルカディア風の地域には見られない。長さ 200 マイルを越えるこの陸に囲まれた日本の海は、島の多い、複雑な海岸線で守られた、幅の広い湖である。強い緑のぎざぎざの山でさえ夢のような穏やかさを破る荒々しさはない。青々とした多くの島々が浮かび、水路は広く穏やかで、人間の生活と営為の印がいつも見られる。

(Eliza R. Scidmore, Jinrikisha days in Japan, Harper & Brothers, 1891 より)

10. ヘンリー・トリストラム『日出ずる国日本そぞろ歩き』1896

イギリスの大聖堂参事会員で博物学者でもあったヘンリー・トリストラムは 1891(明治 24)年に中国からアメリカへ渡る途次日本に数カ月滞在し、この時の見聞記・布教活動視察記を 1895(明治 28)年『日出ずる国日本そぞろ歩き』として出版する。瀬戸内海を東上2回、西下1回の計3回航行したトリストラムは世界旅行の体験から瀬戸内海を次のとおり各国の風景に例える。

長く曲がりくねった瀬戸内海の航海は完全に美と魅力のためにあるのであり、これに匹敵するものは世界にはない。(中略)航海は時期を得ていたので、度々光あふれるお伽の国のような海を幾マイルも航行した。旅行者には思い出し得る最高の海岸風景を思い出させるだろう—春のナポリ湾、夏の朝のウェミス湾、ワイト島の一周旅行、デンマークの海の島めぐり、華麗なスマトラの海岸、入りくむサンゴのバミューダ諸島—お望みの風景を何でも思い出し、ほんの1、2時間待て—そうすれば瀬戸内海にそれに見合う風景を見いだすだろう。

(Henry B. Tristram, Rambles in Japan, the land of rising sun, The Religious Tract Society, 1895 より)

11. アーサー・トンプソン『一週間の日本(永遠のイギリス)』1911

イギリスのアーサー・トンプソンは、モスクワからシベリア鉄道経由で日本に入り、そして上海へと去っていく日本旅行について、1911 年(明治 44)に旅行記『一週間の日本(永遠のイギリス)』として出版する。デッキの乗船客が多島海の風景にいかに興奮したかが伝わってくる

神戸から長崎への2日間の航海はおそらく世界でもっとも素晴らしい船の旅である。私はカレドニア運河はすぐれていると思っていたし、カトリン湖もこの上なくみごとだと思っていたが、今後秀でた水の風景について語るとすれば、日本の瀬戸内海の風景を引用するだろう。(中略)それは 10 月のやわらいだある日のことだった。昼食の後いつものように甘い眠りにうとうとしていると、突然、外を眺めていた幾人かの乗客の賛嘆の叫び声におこされた。そして2分後には、あらゆるデッキチェアーから人々が立ちあがり、ふだんは寄りつかない船首に興奮した人々が群がり、魅惑的な多島海の印象をおさめようとあらゆるカメラのシャッターがきられた。

(Arthur M. Thompson, Japan for a week (Britain for ever), John Lane Co., 1911 より)